WASON
HQ
1104
J74+

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百八十一號

要目

丹治ふか子小傳

活風流

女子敎育大勢一轉の機會

透谷北村君の逝くを追ふ

轉禍成福

床の間の自然界

明治二十七年五月二十六日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百八十一號目録

社説
轉禍成福
女子教育大勢一轉の機
透谷北村君の逝くを追ふ

文しらべ
名媛百絶(下)万物外史輯

家政
活風流
主人の器物をはむる時
床の間の自然界
富士の額、墨田の置物
風流の卓識

史傳
養蠶家丹治ふか子小傳(藤井淡洲)

兒籃
水銀のはなし(若松しづ子)

文藝
同訓異義

理學
空氣植物と寄生植物(けい子)

書架
俳諧史傳の評

片々
德育の必要
學問責めと實業教育
批評專門雜誌の必要

時報
皇后陛下の御誕辰○皇后陛下の御解部◎山梨英和女學校○裁縫科教授法取調○裁縫科設置の計畫○學齡未滿の幼兒教育○島根師範學校女子部假入學○婦德養成と機織業○小學女生徒の養蠶○女教員◎褒章下賜○貞婦受賞◎支那皇太后の徽號○オール嬢の談話◎孤兒の友

本紙前々號及前號の表紙に明治十九年初刊とあるは明治十八年初刊の誤植なり本紙第一號は十八年七月發兌したり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十七年五月廿六日發兌

第三百八十壹號

社説

轉禍成福

凡常の人は禍にあひ候へば、又禍を足し申候、中等の人は禍ぎりにいたし候、その上の人は必らず轉じて福といたし候。とは、天下の政道に絶倫の經驗を積んだる花橘錄の著者が遺訓にあらずや。

武夫の尤とも弱きは、軍敗れて逃げ行くの時にあり。此時に當つては、一鳥の鳴くも、山風の號ぶも尚ほ膽を寒からしむべし、何んぞ況んや大勢の追つかくるに對ひて盛りかえすべき餘勇あらんや。苟くも、敵にうしろを見せなば、遂に怖遁して溝壑に陷いるの外あるべからず、人間一と度び恐氣を生ずれば、もはや死せるにひとし、安くんぞ之に活動を求むべけんや。

此故に、戰士は、軍敗れて慨氣いよ〳〵振ひ、逆境に際して初めて滿身の快活なるヿを覺ゆ。如此き時にあらずんば、全力を傾盡するヿあたわず、此如き機會にあらずんば、思ひ切つたる大處置を決行するヿ難し。こゝを以て卓人は、亂世に福音を聽き、逆流に平路を認む。禍を轉じて福となし、一大警醒を國民に與ふるは、則はち此の好機會にあらずや。

顧みれば、數年前來、反動の氣運一時に勃興し、進歩黨中、顔色を失なひたるもの多し。俄然萎縮して保守頑固の舊壘に降參し、忽まち前日の態を易えたるは多く、此般の徒にあり。大勢則はち一轉し、流行頓に趣むきを變じ、輿論全たく表裏したり。此に於てか、尋常の士、此の勢ほひに反抗するヿ能わず、恐怖して竄遁し、息を殺ろして輿論の爲すがまゝを放觀せんとなしき。吁、斯の如くして、進歩黨たるの氣慨何處にか存する。

試みに、吾が女子敎育の社會を觀んか。明治十七八年以降數

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

年間の繁昌は、そも〳〵如何なりしぞ。よしや之を一時の流行にてありしとするも、既に一と度び此の流行に身を許して進取の氣運に伴なひたらん人士、明治二十二三年以降數年間の閉口絶息は、何事ぞや。而も、恐怖は、畏縮となり、畏縮は、保守となり、保守は頑陋となり、惟ふ昔し、當年紅顏の美少年も、今ま早や半死の若年寄となり、そろ〳〵自から疑がつて自信活動の氣聾盲し、遂には絶望して女子教育なかなかに行われずなどくやむとなれり。

大勢は、大ひなる勢ひなり。流行は、大河の流れ行くがごとし。之に反抗せんとの容易ならぬは、勿論なりといへど、そも〳〵大勢及び流行なるものの亦是れ一所の元動力によつて生起せられたるとを思ふに於ては、之に新動力を加へて、更に之を一轉せしむるとを得るの餘地必らずや存するとを覺る。岩の動かざるものを動かすは難し、既に動く所ろのものを一轉せしむるは容易すからずや。水の流れざるものを流すは容易からず、既に流るゝ所ろのものを一轉せしむるは難きにあらじ。既に、大勢と流行との力あることを知らば、此を轉じて別に利用するの道を悟覺すべし。之を「死中に活をさぐり、禍に福を求むる」とは言ふ。此事や、眞とに時勢の上に超脱するものに於て初めて能くす。常世に閉口し畏縮し竄遁する所ろの臆病者にして如何で能く此利用を遂ぐるの餘裕あらんや。

女子教育大勢一轉の機

今の人、口を開けば言ふ、女子教育衰ろへたりと。吾儕は、之を信ぜず。

見よ、裁縫學校は如何に繁昌なるか。女子職業學校は、如何に繁昌なるか。見よ、此の種の女學校に於ては、確かに學生を増加しつゝあり。たとひ増加せざるとも、決して減員することなし、然るに、何を目して女子教育は衰ろへたりと言ふや。

蓋し此の言者は、西洋風、もしくは、文明風の女子教育の衰ろへたるを言ふなり。然り、此の風の女子教育は、數年前よりも衰ろへたり。然れども、これ父兄が其の女妹を教育するとの衰ろへたるにはあらず、たゞ之を教育する仕方の變はり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たるのみ。故に云く、女子教育は衰ろへず、たゞ其教育法に於て變化せしを見ると。

何故に、教育法は變化せしや。これ、世間のハヤリの變化せしが故なり。世間、西洋風を好む、こゝに於てか西洋風の女子教育ありき。世間、進歩主義を喜こぶ、こゝに於てか、文明風の女子教育ありき。然るに、近年此等の氣風を擯斥し、一躰に古風を好むこととなりたり。女は、ぬひ針、女工等に達すれば十分なりと評判するに至りたり。こゝに於てか即はち古風もしくは、職業的の女子教育隆盛となりたり、何の不思議なることもあらず。

夫れ、教育は、ハヤリを追ふべきものにあらず、一時の流行につれて女子の教育を變轉するは、不都合の至りなりと知らるれども、左りとて平凡尋常の父兄が斯く承知することは稀れなり。實際、ハヤリを追ふて妹女を教育するは、免かれがたきこと也。妹女は、到底、他に縁付かするものなれば、即はち他の好む所ろに相應するように躾せざる可らずと思はんこと、尤ともなる父兄が情愛なり。此故に、ハリヤに隨がつて女子を教育すべからずと説法するも、ハヤリに隨がつて教育するが、父兄の情けなりと知らば、世を導びかんとするの士は、單に純理を説くことを休め、先づ以てハヤリを一轉せしめ、ハヤリと正道とをして相ひ合致せしむることに力を盡さずんばある可らず。

母妻たらしむることを旨とするの普通教育に於ても、裁縫及び女工のみの教育が其目的に對して不足なることは明白なり。育兒上の生理、心理は、かくして學ぶこと能はず、內助の上の、經濟、社會は、かくして學ぶ可らず。裁縫及び女工のみの教育にして如何で能く賢母良妻を作ることを得んや、又今年、女妹を教育するものは、眼を六七年后の社會に着けざる可らず、今年の女妹が一家を修めて世に立つの世は、即はち六七年后の社會なればなり。左れば、ハヤリを追ふて其女妹を教へんとするとも、所云るハヤリは之を今日の形にさとらずして、之を六七年后の推察にもとむべし。之れ明白の理義にあらずや。凡そ此等明白なる事由は、尋常平凡の理窟なり、尋常の父兄安くんぞ之に同意せざらんや。

此故に、今の女子教育に歎ずるものは、單に空しく之を歎きかこつことを廢し、當に、女子教育界のハヤリを一轉せしむる

とに盡力すべく、又、當に、將來六七年后のハヤリを預想して其趣むきの現今の狀態に同じからざるとを說布すべし。之が爲めに、全國同志の女學校、及び女子教育者は、相ひ連合して運動し、呼應して同もに大勢を作起するとをつとむべし。其法たる、蓋し左の如くにして足らん、

一　全國同志の各女學校相ひ同盟して女子教育の勢趣一轉に盡力せんが爲め、盛んに演說、小冊子頒布の二方を執るべき事。

二　各女學校、區域を定めて受持館內に遊說し且つ頒布すべき事。

三　關東關西に、二名づゝの遊說員を定め、東西夫々大ひに遊說せしめ各所に大演說會を催ふすべし、但し各區域內の受持遊說者は、之に伴ひ又は之に先后して均しく遊說すべき事。

四　委員を定めて平易簡潔なる「女學のすゝめ」（學問のすゝめに類して可なり）を作らしめ、之を成るべく多數印刷し各地に頒布する事。

五　以上の入費は、同盟女學校の分擔及び寄附金を以て支給すべく、且つ之が爲めに關東關西二ヶ所に事務局を置くべき事。

夫れ、畏縮は、万事を殺ろす。況んや、改革進步の一大事業を遂行せんとする時に於てをや。時は、氣力ある者の爲めには、つねに好時なり。況んや、今時は、正に機一轉すべき好々時節なるをや。烈告す四方同念同志の友、何んぞ速やかに起つて一大同盟軍を興さゝるや。

透谷北村君の逝くを追ふ

嗚呼、透谷、君を逝して何處にひとり逍遙せんとするや。

君が妻子こゝに在り、君が友人こゝにあり、君が詩文こゝにあり。ひとり天才、何處にむかひて遊ぶ。

去年、われ西に春を迎へて客舍に君が芭蕉を想ふの文を讀めり。ことし君、松島に殘花を惜しみて、たちまち、君が世を去りたるとをきけり。

嗚呼、透谷。こゝに暫らく現世の會面をたつ。悲矣哉。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文しらべ

名媛百絶（下）

万物外史 輯

○宋

春日雜書 朱淑眞

春來春去幾經過、不是今年恨最多、寂々海棠枝上月、照人清夜欲如何。

宮詞 楊太后

瑣窗宮漏滴銅壺、午夢驚回落井梧、風遞樂聲來玉宇、日移花影上金鋪。

其二

用人論理見宸衷、賞罰刑威合至公、天下監師二千石、姓名都在御屏中。

哀被虜婦 聶碧窓

當年結髮在深閨、豈料人生有別離、到底不知因色娶、馬前猶自買臙脂。

寄遠 陳氏

忽夢夫君得意旋、醒來情緒轉凄然、曉風不管閨中恨、故送鐘聲到枕邊。

寄外 譚意歌

瀟湘江上探春回、消盡寒冰落盡梅、願將見夫似春色、一年一度皈來。

○元

題畫 鄭尤端

青松極望是桃花、去々仙源路不賒、便好解衣銜水過、洞中午飯熟胡麻。

秋窓書懷

詩骨從來不受肥、那堪衰病弗勝衣、朝來試把羅君整、瘦比今春又半圍。（君恐裙）

念舊

憶昔娉婷十五餘、匀紅傅白鬪西施、如今老去慵粧洗、正是梨花遇雨時。

琵琶亭

天空月白江水寒、斜抱琵琶寄所宜、自古佳人多
薄命、不須惆悵販茶船。

寄別申生　　嬌紅

如此鍾情古所稀、吁嗟好事到頭非、汪汪兩眼西
風淚、猶向陽臺作雨飛。

詠梅花　　楳花尼

終日尋春不見春、芒鞋踏破嶺頭雲、歸來笑撚梅
花嗅、春在枝頭已十分。

竹枝詞　　曹妙清

美人絕似董妖嬈、家住南山第一橋、不肯隨人
過湖去、月明夜夜自吹簫。

竹枝詞　　張妙淨

憶把明珠買妾時、妾起梳頭郎畫眉、郎今何處妾獨在、
怕見花間雙蝶飛。

○明

初夏　　謝五娘

啼鳥聲中午夢回、篆香重撥已成灰、東風似恨春歸
去、吹送楊花入戶來。

其二

庭院瀟風枕簟清、海榴初發雨初晴、香銷夢斷人無那、
聽得新蟬第一聲。

冬夜　　毛鈺龍

玉井無聲戶已扃、一庭霜月冷如凝、誰憐寂寞書窗下、
凍影梅花伴夜燈。

竹枝詞　　朱靜菴

橫塘秋老藕花殘、兩兩吳姬蕩槳還、驚起鴛鴦不成
浴、翩翩飛過白蘋灘。

○清

寄子　　徐氏

家內平安報爾知、田園歲入有餘資、絲毫不用南
中物、好作清官答聖時。

憶父　　朱凌雲

吳樹燕雲斷尺書、迢迢兩地恨何如、夢魂不憚長
安遠、幾度乘風問起居。

女郎詞　　胡氏慎容

相呼同伴到叢祠、偷看新來客是誰、又恐被人先

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

瞥見、却從紈扇隙中窺。

秋風　　呉若華

滿耳蕭騷夢不成、殘雲涼月夜淒清、等閑吹落長林葉、雜入千家擣練聲。

方舟盧先姑墓感賦　　朱柔則

纍苦枕塊空山裏、却望松楸淚泫然、縱使慈烏能反哺、可能飛得到重泉。

家政

活風流　（一回）

人生に風雅風流なかるべからず、女性に於てことに然りとす。人よく之を論ろへども之を味はふものは多からず之を味はふものも死活を辨ずるに至つては、殆んど稀なり。われ愚かなれども、之を好むと淺からねば、見聞の都度、かきとめて自から戒しむるとも亦深し。こゝに揭げて公けに示すは、朋をもとめて相ひ練磨せんことを冀

ふがためのみ。

○主人の器物をほむる時　　少楽斎

よからぬものを譽るは固より人を欺むくなり、併しよからぬ中にもいづれかよき所あるものなり、其よき所をあぐるが茶の本意なり、茶入にていはゞ恰好もあしく藥がかり燒なんどもあしくとも、地土よきか、一たいのとり合せよきか、持こし人の由緒よきか、いづれよき事のなきものはなし、若し一つもとり所なくば、道具見たる一禮いふべきのみ。いまどき鑒定する事を尊ぶは、茶の本意にたがへり、よく言ひあてしとて面白き事もなし、いかほど此品は見侍りて見覺えしと主へ通ぜんも本意ならず、いつも初めて見る心地こそうれしかるべけれ。道具もあまりに長々しくみるもうるさし、さと見るものこり多し、程よく見て人へ渡して意の殘るやうにしたし。見て人へ渡して今日はあつし寒しとよそ事いふぞ本意なき。まして價の高下などいふはいふも更なり、多くの金出して此品得しなど云ふ主人もあるべし、いと笑ふべし。

と、昔し人が老の波に書きしるしたる高眼をどろくべき哉。

○床の間の自然界

床の間は、何如にも奥深く見ゆべし、懸げたる軸、生けたる花、据えたる盆、何れも添色照映して盡きざるの意を餘韻にあらはすべし。近ごろ或人の家にて、軸に家鶏を畫き、前に山鳥の置物したる、主人が無用意のほども知られてにが〳〵しかりき。古人の説に、懸物かけぬるも書畫ともによく心を用ゐるべし、たゞ無盡の意あるべき也、いかで一定すべき、紅葉の盛んなるころ花を多くいけて後の床には、花も紅葉もなかりけりといふ歌かけたるは、斯る紅葉も客をもてなすには猶ほ足らずとて、花も多くいけて尚ほ客を思ふのあまり、花も紅葉もなかりけりといふ歌かけたるもをかし。また紅葉の盛んなるに花は及ばじとて、花もいけず、紅葉には香のなきこそうらみなればとて、香爐出さんもをかし。かやうに様々の心遣ひ、主客合躰したることそ目出たけれ。

○富士の額、墨田の置物

四方に廣ろき景色あり、庭前に物ふりたる木立あり、全躰のおもむき宏大なれば、此の廣ろき限りを家の裝ほひの中に、取こめて、飾りを壯美壯大にすべし、之れ活きたる風流なり。然るに、かゝる家居に住ひながら、徒らに古俗の雅趣にまね、風流は必らずしも一定せしものと誤まりて、わざと修飾を狹き家の内にのみ限り、觀る人の眼界を屋外に放たしめぬこそ、心小さき覺悟なれ。家もし富士を望むことを得ば、之を庭園内に取こむべし。窓もし墨田川を見下さば、之を床の置物とすべし。何んぞ必らずしも、軸と額とを以てのみ飾らんとはするや。夫れ、此等のものは、皆な已を得ずして生じたる家の修飾とは知らずや。

○風流の卓識

樂翁公は曰く、ありか定めずさまよひありく行脚のものの風流もあり、堂々たる諸侯の風流もあり、農夫の束帶

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

したるが風流にもあらず、諸侯の鄙夫の衣をき、鄙夫の住居にすみたればとて、風流とは云ふべからず、夜もすがら月に向ひて入さの山の端ながめあかしたるも風流なるべけれど、諸侯は寢るにも時刻の定りあれば、はや其時刻至りぬれば名殘惜しき月を見すてゝ戸推し立てゝ寢るが諸侯の風流なり、諸侯數寄屋に反古なども て壁のこし張りたるは口惜し。得がたきほどの筆を裏かへして張らせんも如何なり。有ふれし文の反古はるべきは貴人には似合はざるとなり、たゞわび人のまねするは劇場なんどにて、女のまねし法師のまねするに異ならず、何んぞ風流清雅といふべき◎又、宗易が千鳥の香爐を千貫にて買ひしは奢りのやうなれども、もと宗易は隱士にて世に何の勤めもなく唯だ茶のみ立つることを業とする人なるを、豐氏より采地をびたゞしく得たればもとより、富足りてけるにぞ、親戚朋友をもさぞ困救したりけむ。如何にしても黃金は餘りあるべし、又其風流を好む隱士、守錢の奴ともなり侍らじ、されば世に名ある器にて而も我心に叶ひたらば、千貫にて買はむも罪とは云はじ、宗易すら千貫にて買ひしとて買ふまじきものの身にて買ふ人は、宗易の心を知らざるものといふべし、殊に宗易其の千鳥の香爐をかひとりて足一分ばかり高しとてすらせけるなんどは、凡俗の量の及ぶ所にあらず、今の世の人は多く名にめでて實に善きか惡しきかをも知らず、眞贋の差別ももとよりなく人頼みして鑒定を得て二重三重の箱に入れて秘藏しぬる類は、宗易の千鳥の香爐かひ見しとは固より同日の論にはあらじ。十家の產とて露臺をやめられたる漢文の心を體せば、千貫の半、百貫の半ばたりとも王侯貴人なんどには如何あらん。いかにとなれば、三年の貯なきは國其國にあらずといふとて、諸侯の封地多く賜るは此等に財費せとの事にはあらず、天下の御爲めにこそ封地賜ひて藩翰となし玉ふならずや、されば第一藩翰の任よりして或は公に奉ずる用度、または臣民を養なひ荒政の備なんどもとより一つもかくべからず、何の餘財ありて器にも及びなむ。それらの事も足りつくしたりとも君の躬は臣民の敎ともなれば、人に君たるもの其妖物を買ひぬれば下これより甚しき事あるは習ひにし

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

て臣民こぞりて無益の玩物に志を失ひぬらん、左れば事たりたればとても又心得こそありぬべけれ。夫々の器とてもあながちに捨べきにはあらず、又あながちに求め傳へんとは露も思はず、賢者の持たりと聞かばいと慕はしくも尊とくもありなむ、夫れとても其言行こそあれ手澤存する器は貴とく慕はしき計りにて強ひて求め得んとは思はず、まして茶人をや。かく言へばとて衆に背きて人の尊とむものを態といやしみ、名物の茶入を唾壺とし、水さしを便器になすなどは、世に逆らひ人を驚ろかすの業にしていとねじけたる心也。たゞ名物をば名器として昔よりあらば在るに隨はん、なくば無きに隨はん、豐臣氏などの頃、高料の價を定めしは英雄の心にして是らは今の人の知る所にあらず、たとへば軍功戰功あるに一つひとつ釆地を割あたへんやうもなし、金與へんには英雄の士いかで悅はん、故に斯るものも其用の用を爲し〻にてこそありけめど。風流を觀ずると、茲に至つて初めて活眼高しと言はん。

史傳

養蠶家丹治ふか子小傳

在福島縣　藤井淡海

我邦賢婦人寡からずと雖ども、世に傳へられざるもの多し。本年初春の頃と覺ゆ、女學雜誌に、我邦第一の養蠶家は女子なり云々の記事ありたり。又長野縣人相馬愛藏君より傳聞せるとありし。此に於てか始めて丹治ふか子が我邦養蠶家として聲望の高きを知れり。實にふか子、身は是れ一個の寡婦にして、幼齡の少年を擁し、營々先夫の遺業に從事し、年々許多の傳習生に其處を得せしめ、直接其飼育に當らしめ、蘊奥を傳授す、然して亦同業者中にありては、嶄然頭角を顯はせり。

女史は福島縣伊達郡山戸田村丹治梅吉氏の未亡人なり。良人歿後の遺産を繼き、家聲を維持し、煩雜なる業務を理するの外、老母に孝養を盡し子女を陶育す、曾て良人が生前に於て成したる畢生の事業も又以て女史が内助の力與りて多きに居

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らずむばあらず。女史素より繊弱なる一婦女なるに、その事業を覯れば如此し。豈に尋常巾幗の流ならむや。

ふか子女史は故丹治伊左衛門の長女、弘化元年四月を以て郷里なる山戸田村に生る。其繈褓にあるの際よりして親しく蠶兒飼育の狀を目擊せられたりと。されば當時業に已に之が感應の腦裡に銘刻せしものありたるならむか。女史が始めて斯業に從事せられけるは八歲の年なりき。爾后累年非常の勉強と忍耐とを以て矻々斯業に勉勵せり、女史が養蠶業に從事するや、擧動甚だ機敏にして而かも靜肅、其修練して得たる手藝の精巧なるに至りては、實に驚くべきものあり。蓋し女史が當時に於ける辛酸は今日に想像し得べからざるものあり。其寒暖を知るに於て、其時刻を知るに於て、當時は今の驗溫器時器あるにあらざれば、鷄鳴を期し、蛙聲の律を驗したるが如き、女史が當時辛酸の一斑を知るに足るべし。されば女史が執業以來荏苒今日に至るの間、累年掃立より熟蠶に至るの日子曾つて逕庭せしことなしと云ふ。又、女史が器力の下に局促せず、機に處し變に應じ、機轉は這般の老練に器械の要なし、之に依賴するの弊は計らざるの失敗に陷るとを覺破したるも、其胚胎したる處は當時の辛酸に遠因せずむばあらず。而して養蠶期中は女史曾つて解帶安褥せず。一意機を察して變に處す、一期不斷斯の如しと。蓋し毫釐の失機は以て千里の敗を致すの恐れなきあたはざるとを警悟したればなり。

安政三年同族梅吉氏を迎えて、配偶是に成る。後ち別戶して相共に產を營む。氏亦尋常斗筲の輩にあらず。是に於てか當時の鄉黨稱して双璧相偶を奇とす。然れども其未だ壯なるや放逸無賴に陷り、常に產を顧みずして、飄然去りて江戶に遊び囊底盡くるに及むでは、或は轎夫となり或は博徒と交り放蕩至らざる所なく、遂に鄉黨の嗤笑する所とはなれり。此間家計窘窮し家產一物を止めず。然れども女史が尊むべき貞節は之れが爲めに愈々發揮し、女史が忍耐の精神之が爲めに一層修練せられ、其不撓の膽力を鞏固ならしめたるも、亦經世の秘訣を悟り得たるも是が爲めなりとぞ。良人放蕩にして常に閨中冷かに孤枕節を守り、艱難累月に涉りて逆境爰に三年、其間慘然殆むど筆紙の盡す處にあらず。會々梅吉氏流離顚沛の餘り、一朝感ずる所あり、歸るに及むで飜然悔悟し、再び前轍を蹈むとなかりき。是れ賢婦の至誠の感化する處にあら

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ずして何ぞや。後年家道の興るに及むで、諸縣下より多くの傳習生の業を受くるもの、丹治夫人が待遇の厚きに感ぜさるものなし。爾后世路の辛酸は夫妻の共に玩味する所となり、同情惻穏は相共に忍ばしめ、梅吉氏も亦一旦悔悟の后は熱心潛意夫婦斯業に從事するの外、又他事を顧みず。果せる哉數年を出でずして、諸般の障害を除き一の失敗なし。闔郷感嘆して熟達無双と稱せり。是より先き蠶種繼續製糸不整、海外輸出に適當せざるを憂ひ、茲に於て生糸を一定均一ならしむるの必要を感悟し、梅吉氏之を女史に謀る。女史稱賛措く能はず、直に其事業を負擔し女史先づ撰繭法を行ひ、繼で糸線の太細長短、糸量の多少、糸質の强力伸力、光澤及び形狀、解舒纖壁等夫々器械を以て試驗を行ひ、其の他許多の經歷の結果として、遂に純粹なる、赤熟中巣の一種を撰出せり。是れ實に養蠶社會の一大現象と謂はざるを得ず。蓋し女史此間試驗に費したる一粒撰の繭得て八石餘に達せりと云へば、其志氣の尋常にあらざるを知るべきなり。

是より先き安政年度の頃より、本邦生糸の海外に輸出せらるるもの愈々增加し、蠶卵紙も亦泰西の需用に適し盛むに輸出せられたり。然れども利害相伴ふは理數の免がれざる處か、當時精良の蠶種稀にして而も猾兒が狡手段を用ゆるとあり、茲に本邦生糸蠶卵紙の聲價將に地に墜ちむとせり。斯に於て梅吉氏以爲らく、養蠶の事は本邦固有特技の物產にしあるにも拘はらず、當時養蠶家たる者概ね徒づらに目前の射利に汲々として、其極粗製濫造の弊之れに伴なえるとを悟らざるが如し、國家百年の長計爰に止むと。氏、之れを憂ふるの餘り、先づ蠶糸を改良せんには原紙を精撰せざるべからずと覺り、因て村内某氏等と計り一の組合を組織せり。之れ地方蠶種改良の嚆矢なりと。而して是に至れるは一に、ふか子女史の内助に依らざるはなし。

當時福島縣佐野理八(滋賀縣出身の人にして製糸改良家として有名なり)柏木幸三郎氏等と共に、製絲改良に盡力し、或は敎師を各地に派遣して製絲の技術を敎えしめ、或は器械を與えて之れを使用せしめ、或は各地に奬勵せり。

女史は良人が志の成らんとを欲して、則ち自製に係る精良の蠶種を有志に施こし、之れを飼養せしめ、或は生徒を募りて製糸の方法を傳習せしめたるもの數百人、是れより製糸濫造

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

の弊を断ち、茲に改良掛田折返し糸なるもの出で、稍や聲價を博するに至れり。明治十三年生糸濫造の弊再び生じ、梅吉氏官に稟し生糸改良の方法を建言し、郡中各村を巡回せらる。又生糸審査所を設け、其精良品に印紙を貼附し之れを證せむとす。之れ亦、官の嘉納する所となり、氏を擧て郡中大世話係りとなす。是に於て聲價再び挽回せらる。同十七年官金を賜ふて其功勞を稱せらる。當時氏が家政窮し氏は繿縷を纏ひ常に粗食し、衣服雨露に濡れたる時は徹夜之れを火に乾かして業務を執る、亦炎暑三伏の候、氏は四方の志士を訪問し、國利を談じ內を顧みれば困窮極まれるにも拘はらず、一意事業の改良進歩に熱中し、身を公益の爲めに犧牲となし家事を顧みるの暇なし。女史此多難繁劇の中に家政を理し、能く氏が意を躰し、氏をして內顧の憂なからしめたり。時に氏の外より歸るや之を慰め、時に氏の落膽せるを勵まし、蹶然奮興せしめたる、女史の酸惱辛苦相像の及ぶべきにあらず。

（未完）

兒　藍

水銀のはなし

若松しづ子

先頃の試験休みに太郎と二郎、久しい前からの約束で、駒込の伯父の家へ泊り掛けに行升た。併し雨勝の天氣でそとへは出られず、少年園や幼年雜誌も讀みあき、二人は不平ら敷顔して茶の間にツクチンと坐つて居り升た。

つまらん、チ、兄さん。

二郎は欠伸まぢりにいひ升た。

さうさ、モウあした歸るつていふに、またモウいつこゝへなんか來られるか知れやしない、思ひッ切り廣つぱで遊ばして貰ひ度ナ、雨なんか降らずに。

二郎は急に思ひついた顔して、

兄さん、物置ィ行つてチッキしよふか、おばあさんにさういつて、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

よしッ賛成だッ!

子供の氣早さ、モウ廊下へ駈けだし、祖母の居る離れへと心ざし升た。ガラリ障子を開けると祖母は居ず、生憎伯母計りでした。子供たちは、何をも自分たちの心任せにしてホクホクと悦んで居る祖母が居合さぬに少し度を失なひオヅ〳〵しながら、口を揃へて、

伯母さん、二人して物置へ行升よ、遊びに、

突然にビックリさせ升たチ、マア、仕方がなからうか、なる丈、亂暴はお斷りですよ、

伯母の言葉の途切れぬ中、二人はとふに行つてしまひ升た、廊下をドシ〳〵鳴りひゞかせて。伯母は獨り言に、

本當に男の兒の元氣には恐れるよ、始終居たら慣れもしよふが、折角來て、それでも、思ひ切り樂しませて遣らずばなるまい。

其中坐に戻つた祖母はニコ〳〵しながら、心一杯に

さうとも!

チツキにする木を探ねるとて、子供たちはあちらこちらと搔き廻すと、古るい蜜柑箱の底に色〳〵破れた金物に雜つて、一ツの破れた寒暖計を見つけ升た。

ヤア、寒暖器があつたチ、兄さん、

寒暖計ッていふンだよ、こりやア好いもんだから、伯父さんに聞いて貰わふ、

そんなもの何するんだ?

ソラ、此球ン中に澤山水銀がは入つてるだらう、出して遊ぶんさ、面白よ、をせいて遣るから、

チツキも今は全く忘れられて、子供たちはまたも駈出して母屋の方へ行升た。

伯父さん、これ貰つて好いかへ?

伯父は見て居た書物の上から二人を眺めて、

それをどふするつていふンだ、一寸こゝへ持つて來て御覽、

太郎は素早く

水銀出して遊んだよ、とめ(下婢の名)に小皿一枚借りて來よう、

マア待たよ、不用だからどふしても好がナ、一寸見て御覽かふ火鉢の上へ翳すと、こう水銀が上へあがるだらう、そとへ出せば直と下る、

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

子供たちは伯父が書見をやめて、合手になつて呉れるを何より悦び、

伯父さん、それだけれど、なぜさうなるんだらう

水銀は寒暖を感じるのが非常に鋭いからだよ、少しの時候の變りで上り下りをするから、氣候の寒い暖いから、躰の熱度を計るに至つて重寶なのだ。それ計りじやない、晴雨計にも矢張りこれが要るんだよ。晴雨計といふものは全躰大氣の重量を計る爲の物なんだから空氣の壓力に觸れる樣にして置なければならない、それで、通例の晴雨計には、革の袋へ水銀を入れて、器械の後ろの方へ着けてあるよ。それで晴雨計を見る時にや、其袋は藏れて居て、それに通じて居る管丈を見るんだ。晴天の時には、空氣が重いから、(人は間違つて反對をいふがね)此袋を八方から壓するといふもんだらう、そこで管ン中の水銀が自然上る譯になるんだ、濕氣を含んで居て、大氣からそれほどの壓力を受けなければ、隨つて縮んで行んだナア、

太郎は問を起して、

伯父さん、まだ外にもこんな水見たいな金屬があるかチ?

ないチ、これ計りだ、不思議なとには、拾わふと思へば、指の間から漏つてしまふし、すつかり振れば細かい粉になるし、他の金屬を呑み込む性を持つてるし、激烈な熱に逢せれば、丸切り消えてしまふし、西洋人などが昔しから生銀Quick(Living)Silverといつて置くのは、其妙不思議な質を備へて居る處を考へたもんだらう。二郎は金屬は何々を知つてるカ?

金、銀、鐵、鉛、銅なんか知つて升。

さうだ、それでみんな堅からう、ナイフで削れるのも中にはあるが、先へ溶解して置なければ、桶の中へ汲取れる物なにかはない、併し凍らせれば、丁度鉛の樣に伸ばされるし、時としては方形の塊りになるとがある、沸騰させれば、無色の蒸氣に化してしまふよ。

瞬ろぎもせず、伯父の談話を聞いて居た太郎は、

水銀を桶ンなかへ汲み出せるなんて、それじやア採掘には大變雑作ないんですね?銀だの金だのは、いろんなものと雜つて丶、掘り出してもそれ計りにする迄には金も時間も非常にかゝるつて先生が敎へて呉升たもの。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

中々さういかんよ、なぜといふと、硫化水銀といつて、硫黄と水銀が一處に化合して居ることが多いんだよ、それだから其岩を採掘したあとでも、それを熱して、水銀丈を蒸發させ、備へつけた器へうけて、再び冷し、流動體にするなどの手數は是非かゝるんだ。水銀鑛に働く工夫が時としては、岩を其儘熱することがあるが、其間に水銀が鳩の玉子位の大さになつて轉がることがあるさうだよ。見たくなつたらう。

水銀の製造處へ行くと、随分珍らしいことを參觀人に見せるよ、たとへば、大鍋へ水銀を入れて、それへ大石を浮かせ、沈まない所などは一寸眼新らしくつて手品の樣だ。

伯父さんなぜ浮てるんだらう？

おまへたち、木が水の上を流れるとこ見たとが有らう？

でも、それとは違がふでせう？

道理はおんなじさ、水の上へ木の切が浮くのは、木の切が水よりか輕いからだ、石と水銀では、石の方が輕いから、矢張り沈むとはないんだ。

一度、水銀の鑛山へつれてつて見せて下さいな、伯父さん？

それはチト六ケ敷、世界中に水銀の鑛山はたつた四ツしか大きいのはない、北米でカリフォーニヤ南米で、ペルー、其外オーストリヤとスパニヤのアルマーデンだ、日本では、德島縣にたつた一ツ產地があるが、極く小量しか出ないで、大抵支那と米國から輸入するんだ、近年の輸入額は十万斤内外ださうだよ、水銀と硫黄の化合物を粉にすると、誠に美しい色の繪の具が出來るが、これが例の朱といふもので、これは昔しからローマでも支那でも色々に用ゐたものだ、さつき、金屬を混合物から清める手數の話しが出たが、此水銀がそれに付ては余程の効能が有るんだよ先づ金銀を含んだ岩を細抹にし、これを篩ひ、洗ひなどしたあとで、水銀と共に器に入れると、水銀は同類の金屬を悉く吸收して砂や岩丈を遺すんだ。それで黄金と一處になつた物だと、即ちアマルガムといつて、歯醫者が歯の空間へ詰めて呉れるものになるんだ。これを熱すると、水銀は飛んでしまつて純金を殘すといふ仕掛だよ。

不思議だね、どうしてそんないろんなこと、人がおぼえたらう子？

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

太郎は不思議さうに申升た。

なんでも一寸にはおぼえられるものではない、多年の間さま〳〵の辛苦を經て漸く發見するんだ。カリフォニヤあたりでは金銀の鑛山が澤山あるがネ、矢張り、水銀の鑛山も間近にあるので非常な便利ださうで、さもないと、遠方からあの重いものを持込なければならんからネ。

伯父さん、それやア大變と結構なものだネ、此金は。

イヤ、まださま〳〵役に立てる道はあるが、それから出る蒸發氣が中々有毒で、工夫が採掘してる中に毒に中つて死ぬることがよくあるよ。廿三年ほどまへにオーストリヤの鑛山に火がはいつてナ、一万三千といふ工夫が中毒をやつたさうだ、死んだものも大分あつたさうだよ。其火を消す爲に用ゐた水をイドリヤといふ川へ流し込んだら、鰻丈は救かつて、あと魚類は恐く落てしまつたさうだ。

二郎は思ひ出した樣に、

水銀は何へ入れて運んだらう、箱かネ

ナニ、羊の革袋へも入れるし、鐵の罎へも入るネ、中々重いから、コルクなにか直ぐ推出ちまンだ。だから鐵の罎で口をするのさ。船の中に積んだ水銀の入物が漏つて乘組人が一同毒に中る、船中の金物が水銀着せになつた話しがあるよ。

太郎は何やら、恐ろしくなつたと見へて、顔色を變へ。

二郎ちやん、モウこんなもの觸るまへ、嫌になつた。

ハヽヽ、そんなにこわからずとも好い、藥につかふから、少しは呑まなければならんともあるは。

兩人一處に

僕なんか嫌だ、呑むもんか！

伯父はまた笑いながら、

ブルーピル、カロメルなどゝいふ藥があらう、あれがみんな水銀劑だから、嫌でもモウ呑んでるかも知んぜ、

折しもさし入る夕日は二人の男兒をチツキ遊びに誘ひがほでした。然るに二人とも、伯父の話しの面白さに何もかも忘れて居る樣子でした。

念慮一毫差　應酬千里訛
人心宜主靜　明月不沈波

文藝

同訓異義（續）

ニハカ

俄 思ひがけもなき急な事に出會ふ事
卒 猝同不意なことに出くはす事
暴 猝暴暴遽とつゞくとのぐわいのはづれてかくごの外になつてくる事
遽 存じよらずにふいとして急卒な事にあふ事

ニタリ

似 その形にてとりちがへそうな事
類 その形に同じやうにみへる事種類なり
肖 そのやうすの同じやうにみへる事
倣 そこらもともにみへる事なー倣と云

ニクム

惡 心にいやに思ふ事嫌惡をきらふ如し
憎 心にくゝ思ふ事

ヌク

挺 鞘をぬきはづす事
抜 引ぬく事ーレ城レー木
擢 ぬきだす事
抽 引き出す事のびている事

チガフ

願 心にさうしたしと思ふ事
悕 希同

ノボル

騰 龍蛇の地をはなれてあがる事
陵 その上になつてゆく事
躋 日光の段々のぼりてゆく事
陟 高き山などにのぼりて行く事

ノム

飲 口へ入れ息を以引こむ事水をのむ事
呑 かますにまるのみする事
嚥 口に含だものをのみこむ事つをのむ事

ノコル

存 あるまじと思ふものがあるを云
遺 とりをとしてあとにのこつてある事、あまる事
餘 食物のくひあまりのある事
殘 そこなひやぶれて僅にのこる事
貽 あとへのこして行く氣味

ノブル

舒 のぶる事のびやかなる事
述 そのあとをのべつぎてゆく事
延 その來ることを長くうける事年をのべよはひをのぶる事
演 ひろめのぶる事ー説ー義
陳 いひならべる事
展 ひらきのべる事
宣 あまねくひきあらはしひろむる意
暢 時を得て草木ののびる事
衍 演と同

ハヅル

愧 己にはぢて心中にうそはつかじと思ふ事
怍 はれがましと思ふ氣味
羞 をもはゆき氣味
慚 はぢ入て面目なく思ふ氣味
恥 それを心に止めて深く心にはづる事
赧 はぢて面のあかくなる事しゆつなき氣味

ハカル

計 物のかずをかぞへ物のつもりをする事
議 それを評議しその行末を見さだめはかる事
圖 向のものをその圖のところへとつてくる事
量 升目或は寸尺をはかる事
謀 その仕組をはかり相談をつける事
策 兵同それに工夫をつけつもりをつけてゆく事
權 はかりにかけて物の輕重をくらべる事
測 その深淺をはかりみる事水中のものをはかる事

ハジメ

始 まだこのことのからならぬ已前のと始終とつゞく
首 そのとりつきのかゝり小口の所ものゝ頭なり
初 史册の文に一字を置て事を叙るにその已前はかうと云ところへ用
創 物を新にしはじめる事

ハナハダ

甚 常例よりはきつう打こえて格別なる事

酷 むごくもつてくる事　むごくあたる事

太 こさの外と云氣味をびたゞしき事　すぐる事

ハゲシ

烈 その勢いにあたり敵せられぬ事

勵 たるみなくその事をするやうにさはげます事

厲 その持領の知れがたくしてこれを氣づかふ氣味

ハラフ

攘 はらふて外へのける事　よせつけぬやうにする事

掃 箒を以てはきのける事

拂 ちりなどをはらいのける事

祓 それをはらふてあさをさつばりさする事

ヒ

ヒク

引 つれてゆきつれて來る事　こちらへ引つける事

牽 つなをつけてひく事　―牛―羊

惹 こちらへひきいれる氣味

曳 ひきずる氣味あさにつけて引く事

輓 車をひく事　作挽非也

扣 ひきさめて向へやらぬ事

ヒトシ

均 つきならして同じなみにする事

等 それさなじなみの事

齊 長短なくよくそろふ事

ヒロシ

廣 狹の反、くわらりさうちひろき事

寛 そのうちになる方のひろき事

擴 廣大におしひろげる事

博 物のはゞのひろき事　帶―

宏 その中のひろく大なる事

弘 廣大なる事　德業の上に用

フ

フルフ

振 ふりそろへる氣味　ふりうごかす氣味

揮 ざいを以て人にさしづをする事

奮 氣をおこして自からふるふてそれにかゝる事

フルシ

古 いくらも年月を經たる遠代をさして云事

宿 もちこしてあさになつた事　夜ごしになつた事

故 ふるく巳前のことになつたを云

陳 いくれんさもしれぬこゝろ

ヘ

ヘツラフ

諂 向の人の氣に入んさして心の外なるとを云事

佞 向の氣を知り利口を云まはす事

諛 氣どりをして向の人に合てゆく事

阿 さりはづさぬやうにまはる事

ヘツタ

隔 その間に邪なるものがある氣味

阻 中にへだてあつて邪魔になる事

障 中にさゝへて邪魔するものがある氣味

閒 あいだに物をまぜる事　あいだのまごはなる事

ホ

ホヾ

粗 あらましと云ふ事　物を精悉にせぬ意

約 物のほどを云辭　大抵をあらくゝりする事

略 物をざつさあらくゝりする事　大概と云ふ事

ホトリ

邊 ものゝぐろりを云　ふちまはりの事

畔 くろさよむ　田のあぜを云

濆 水のほさりの事

陲 遠き四方のはしを云

ホシイマヽ

放 やりばなしなる事　禮法にかゝはらぬ事

肆 やりばなしにしさがす氣味

恣 氣まゝやりばなしなる事

擅 一人にて事をさりあつかふ事　手前がつてさりあつかふ事

縱 行き次第にしておく氣味　たがなごを繩をゆるめて自由にする事

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

理學

空氣植物と寄生植物

[illegible]い子

空氣植物と寄生植物とは、較もすれば、相混同し易し。何となれば、此二者は共に他の植物、又は其他のものに附着して、葉出で葉落ち、花咲き花散るものなればなり。我邦の家庭正しからずと雖も、徃々夫の扶助にのみ寄らず、能く内を理し、家を治め、女子の本分を盡し行く婦人あり。而して世人尙之をしも、尋常普通の家庭と、同一に見做し行くが如し。

空氣植物、抑も何者ぞ、今其概略を述べん。世人彼石斛の花を知るべし。其奇にして華ならず、雅情殊に掬すべきものあるを。世人彼風蘭の花を知るべし。其温にして高く、清香甚だ賞すべきものあるを。此二者は、概ね他の植物の枝に附着して發生するものにして、他の附着されたる植物の上より見れば、恰かも一種寄生の厄介物たるが如く思はるれど、其實全く然らざるなり。其故如何にとなれば、是等は根あり、能く他の植物に附着すと雖も、之を以て、他の植物の躰中より滋養物を吸收するが如きことは、爲さゞるなり。只他の植物の幹枝を以て、我永住の家と思ひ、我終世を托すべきの人とはなせど、其夫たり家たるものは寄縋り、其れに迷惑を掛け、其れが邪魔をなし、其外より得る滋養物までも吸收して、果ては他の植物の榮養上に、差支を及ぼすが如きことは、啻に爲さゞるのみならず、爲すを屑よしとせざるなり。寧ろ其花、其香、他の植物をして、時ならざるの美觀を附けしむるのみ。思ふて此處に至れば、我邦の女子たるもの、豈多少の感なきを得んや。

石斛、風蘭、共に是空氣植物なり、此外ナゴ蘭の花の美麗なるより、降つて地衣、苔蘚の類なども、此種に屬し、重に樹枝、壁上、岩石等に附着す。合衆國の南部、溫暖なる地の樹松が枝には、さまゞの空氣植物あり。極めて美麗なる花を着くる蘭類など多しと云へり。以上皆他のものに附着して生存するを以て、一名附着植物とも稱す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

借問す、空氣植物、何に依りて其滋養分を得、其體を養ふや。曰く、是皆空氣中より滋養分を得るなり。葉の作用に依て、空氣中より滋養分を得るは、一般植物と同一にして、此處には擧ぐるまでもなきなり。而して其作用は、此植物自身の所爲にして、他の附着されたる植物は、毫も之が爲めに、意を勞することなきなり。

次に寄生植物のことを言はんに、其姿、其形、殆んど空氣植物と相似たるにも拘はらず。其性質は全く相反せり。彼等は其奇異の根を、寄生する所の植物中に挿入し、巧みに他の營養分なる汁液を吸收して、己が體を養なへり。去れば其寄生されたる植物は、縱しや時運の然らしむる所、かゝる厄介物を引受けたりとして、自から慰め、我と明らむる所ありとするも、如何せん、我熱心に取得る營養物は、次第に此寄生物に取去らるゝより、幹枝の發達從來の如くならず、甚だしきは、我枯死すると共に、寄生物其物も亦同じく枯死して、共倒れとなるものもなきにあらず。其狀恰かも我邦方今の家庭に、似ざるなしとするも、得べからざるなり。我邦の女子は總て皆夫の寄生物なり。夫に寄りて生活するものなり。語を換へて言へば、彼空氣植物の如く、夫の美を爲さんとはせず、夫に寄縋がり、夫の營養物を吸收し、夫の力を削減して、僅かに生存し行くものなり。此の如くにして我邦の男子が、大事業を爲さざるを責む、恰かも人の衣を薄くして、其寒に堪へざるを笑ふと一般、寧ろ酷といふべきのみ。此の如くにして、我邦女權の張らざるを嘆ず、蓋し又男子にも罪ありと雖も、女子の力、未だ至らざるに基かずんばあらず。其等は姑く措き、此寄生植物は、黴及び白症などの簡單なる下等植物を始めとし、花を生ずる植物、灌木などの中にも、亦多く、大抵種子の樹枝上に墜落し、又は鳥の啄み來るより發生するものにして、其嫩根樹皮を貫ぬきて樹身に入り、固く相密着するを以て、其狀恰かも一種異樣の枝を生じたるに異ならず。酷評すれば、是實に一種の厄介植物たるに過ぎざるなり。此處に其例を擧ぐれば、彼菟絲子と稱する者の如き、夏期卑濕の地に生じ、其黃色にして葉だも有せざる細長の莖を、他の植物の莖に卷付け、其相觸る所、許多の小根を生じて、他の莖皮を貫穿し、是より汁液を吸支して食物とす、倘之よりも心樣ひねくれたるはピーチドロップス並にシヤクジヤウ花

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と稱するもの丶類にて、尋常植物の根上に、自己の根を固着し、以て汁液を吸收す。悪むべきの所爲といふべし。

以上は則ち植物學上、共に特殊のものとして研究すべきものなるが、之を人事に引當つるに、亦甚だ我邦の家庭と相似たるものあり。縦し女子の進歩にして、假かに以て十分の域に達せしむる能はずとするも、寧くは寄生植物に似るの風を改ためて、空氣植物の如きに至らしめたきものならずや。因に記す、寄生植物には、彼菟絲子の如く葉なきものあり、又葉あるも裏面に氣孔なく、縦し之あるも、至つて不完全なるもの多し。尋常植物の葉は、空氣中の炭酸を分解して、其發達に欠くべからざる炭素を吸收する有用の機關にして、恰かも動物の肺臓の如きものなるに、其組織の十分ならざるは、己れ働かずして、他の得たるものを取るに由る。即ち我邦の女子が、夫に寄縋るの餘、女子としての智識に欠くる所あると選ぶ所なし。

獄外有獄納婆界　名利傚意其因縁
眞觀世間多少人　拘繫者裡長戚々

書　架

「俳諧史傳」の評

本社出版の「俳諧史傳」に對する新聞雜誌の批評は本紙廣告欄内に前々號より掲出せしが左の一篇は長文なるを以て此欄内に收めしむ

「俳諧史傳」を讀む（婦學叢錄第十九號 圏點は原文のまゝ）

機　曲

小此木、布川、間氏の合著、女學雜誌社書店の發行する處、中本と雖、三百余ページの丹誠、況や其序言を讀みては、吾人豈冷酷なる評言をこゝろむるを得むや、「貞德、宗因、芭蕉を觀察し敍記するに於て、最も煩を注がむと欲したりき、これこの三光明星、燦として映、他の幾多の俳士は、則ち無數の小星、相連りてこれを圍繞するが如きものあればなり」而して貞德、宗因の二人を、自から芭蕉にむすびたる處、著者の筆の決して凡ならざるを知るべし、著者は俳諧の起源につきて「所謂一種有味なつけむが爲め」に、以ひて附合議を用ひるの愚を學ばず、歷史的に研究の労をとられしを喜ぶ、更に又進化説を利用して俳諧の起源を解釋せしを喜ぶ、まことに著者の思はるゝ如く、幾多文界の現象が、撰選して以て一種の形となりたるもの、是即ち俳諧といふべきなり、かくしてこそ俳諧の大精神が、我國思想界の代表たるを得べきにあらずや、宗祇、宗長、宗鑑、守武、等を略叙し、遂に創始時代の大人、貞德の一門に論及して、筆を轉じて創始時代俳諧の普通性を論し、「月に對し花にうそぶき、面白く興湧ち來るの瞬間、をかしげに詠み出でゝ、我も人も樂しましめむとせしなり」と結び、さらに評して檀林の輕妙、正風の陶冶に比しては、まことに後代俳諧の進歩に因て、僅かに道路を開拓せしのみなれども、檀林、正風二派に於ける關係の、決して輕々にあらざるない

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ふ、是もさより其さころなり、貞徳門の位置は、檀林、正風、二派の爲めに、犠牲さならざるべからざるも、貞德の殘血は、檀林、正風二派の命さなりしこさ少なしさせず、進むで檀林、正風二派を評論する處、著者が一心の力をそゝぎたる處さいふべきか、髣髴さして西山宗因の風姿もあらはれて、彼の俳諧が其末流の如く、無手法なる戯謔のみにあらざるを知る、

有明の油そのこるほさゝぎす

殘燈明滅たる五更の天に、寂然たる彼が心にうつりしものは果して何ぞ、彼の俳諧の心を知らむさ欲せば、徒に奇巧變化のみをいはずして、少しく此處へ注意するを要す、たさへ檀林派の本領は「夢幻の戯言」にありさするも、宗因其人は、檀林派を成就して而して一歩檀林の上にありしを知らずや、後年正風派は檀林派を壓したりしさ雖、到底宗因を壓するこさ能はざりしなり、玄々一評して、古今俳諧の上手は難波の宗因さ伊賀の桃靑ならではなしさいふ、吾人すでに宗因をいへり、進むで桃靑に見を及ぼさむか、彼は危機の及第者なり、高野山で一生の大悲嘆は、遂に彼をして厭世の順禮たらしめたれども、彼は「我」なるものを決して失はざりしなり、彼が俗世を脫せしや、更に大なる自然界に於て「我」なる位置をつくらむさするの手段なりき、著者論して曰「彼はおのれを、自然界に於ける一人類さして、不可知的の高遠なる造化のまに〱したがはむさせり」さ、まことに彼を識るの見さいふへし、芭蕉翁が價値の根本は、確かにこゝに存するものなり、也有が評して「瘦て笑ひ、松老ひて高し」さいへるもの、こゝより出でし姿にあらずさせむ、著者又いふ「彼は浮世のはかなきを知れり……されざこれを悲しみしさ倶に、絶對的に世を嫌惡せざりしなり」さ、まことに然り、彼は世を嫌惡するの念よりも高大なる自然を樂むの念、遙かにまさりてありし者なり、彼は自然をたのしむ爲に、世を嫌惡するの間暇なかりしなり、「心のむかふ所、天地皆俳諧」彼は確かに宇宙の幾分を領したるの人類なりき、こゝに於て彼又浮世に何のもさむる物あらむや、木曾の檜笠、越の菅簑、のみにて、事足れりさなしたるも理りならずや、アゝ人誰か彼を以て、自から輕々敷厭世の奴さなりたるさいふ、彼が臨終の物語の如き(此書には載せされざも)まことに以て彼が大人たるをあらはすに非ずや、兼好法師も西行も、一度彼の眼に入る時は、最早個人性はきえうせて、芭蕉の有する「我」たるを得るに至る、十哲を論ずる段、密、粗の差こそあれ、芭蕉を知る人、何ぞ其門人を知らざるの理あらむや、蕉門の桃櫻たる其角、嵐雪より、資性溫良「得ることの多く、守ることの篤き」落柹舍の去來、著者が記して「孔門の子貢」に似たりさいふ佛幻庵の文章、「後人、芭蕉翁の血脈嗣人なしさいふことなかれ」さ大喝したる五老井の許六、「人は萬物の上にたてる物なり、その人に我あり、その我に東華坊あり……」さごなる自得の支考、氣樂なる野坡、磊落なる北枝、正直なる越人、魚屋の杉風、寫し得て不平を感ずるなし、下りて江戸座、雪門を略記し、轉じて滔々日本全國の俳士に及び、遂に俳論は「我が理想を發露せむさて吟詠し、又吟詠して發露せむさしたるよりも、むしろ自然を觀て、自然に吟咏せむさしたりしなり」さ結論す、吾人は今個々の批評をやめて、讀了後の感を記さむか、思ふに著者は俳諧を系統的に研究せむさ欲して、而して確かに其目的を達したりさいふべし、しかりさいへざも俳諧が日本文學史上に占むべき位置は如何、只單に平民的なるの一事而已乎、吾人は著者が其位置を明かにせざりしを惜しむ、平民的なるのみが俳諧の價値なりさいはゞ吾人はなか〱に承知するを得ず、況むや俳諧を以て平民的なりさするは、其外形にありて其内心にあらざるをや、奈良、平安兩朝に於ける和歌さ、江戸時代に於ける俳諧も、社會の上より觀察せば、何ぞことなる處かあらむ、奈良、平安の社會を研究し、江戸の社會を研究せば、ことさらに俳諧を以て、平民的云々するの愚なるを知らむ、更に和歌さ俳諧さを比較すれば、平民的云々の論は、僅かに外形にさゞまるの淺薄なるを知らむ、しからば俳諧が日本文學史上に占むべきの位置は如何吾人は切にきかむことを欲す、

吾人をして願くは多言するをゆるせ　著者は吾人をして俳諧の起こりし事を知らしめたれども其「何故」に起こりしかを教へざるなり、和歌の腐敗を以て俳諧の發達を卜したれども、同しく其「何故」を敎へざるなり、俳士に脫俗者多きを述べられたれども同じく又其「何故」を教へざるなり、要するに本書は叙事の點に於て、確かに及第したりさ雖、其叙したる事を解釋するの點に於て、大に心理的社會的研究の勉强を缺く、さりながら是おそらくは吾人が望蜀の感なるべし、吾人はたゞ正直に吾人の感をのべたる而已、これを彼の蕪村翁の俳諧論に比し、小

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

中村、落合、諸氏の國文論に比せば、まことに優ること天と地との差のみならむや、此書有りて今日まで出版されたる、日本文學史の大缺點を補ふを得、著者の一人、小此木信一郎氏、今や故山に病むと聞けば、吾人一面の識なしと雖、著者を評する又多少の縁、切に有望の文學者が、全快の期早からむことを望む、吾人は小此木、布川、兩氏の經營を感謝し、これを出版したる女學雜誌社書店を祝ふ、五月九日晩景、

片　々

○意育の必要

片々子

青年子女漸く文弱に流れ、薄志弱行の徒、益跋扈せんとするに際し、ヘルバルト派の教育主義、早くも我が教育社會に認められ、遂に意育の必要を唱ふるものあるに至れり。元來智と云ひ、情と云ひ、意と云ふも敢て、一種の能力にはあられども意育とは、從來の心理學者が唱へたる如き、意力即ち剛毅の氣象、有爲の氣力等を殊更らに養成するとにて、當時國家多事の際、徒に理性を滿足せしめんとて知識論の蝶堂に入り、或は淫靡柔弱の情緒に絆されて、漫に感情にのみよるの弊風を、慨嘆するの意に出でたるものなるべし。

教育時論は「本邦教育史の上より意育の必要を論ず」と題して三回に涉り、能勢榮氏は「大日本教育會雜誌」上に、「我邦將來の教育の究竟目的」と題して、同しく意育の必要を說けり。尙ほ聞く所によれば、西村正三郎氏は、群馬に於て、意育に關する演說を爲したりと云ふ。意育の說、自今益々唱道せらるるに至らん。而して所謂、武道教育は、蓋し此旨に適へるものなり。

○學問責めと實業教育

單に書籍に依れる學問は、實用に遠く、思辨に陷り、空想に流るゝに從て、世を毒すると少なからず、「家庭雜誌」先づ女子教育上、學問責めの不可を鳴らし、「大日本婦人教育雜誌」亦教科書高きに過ぐる論を爲せり。中に云はく、

頻りに學科を高尚にし、轉た相競ふて課程表の華美ならんことを欲するより、讀書科の如きは、僅かに國史略の素讀を了りしものに、支那文學の一端ともいふべき文章軌範などを教授し、英學科の如きも、讀本の二三册も覺えしものに突然ポエトリー等の高尚なるものを授け、其他數學に、理學に、分數の咀嚼さへ十分ならざるものを推して、幾何代數或は三角術等の深遠なるものを學ばしむるに至り、日夜營々として學科に逐はれ書籍に驅らるゝのみならず、其教科書の浩瀚なるよりして、一學期の授日子、到底其半ばをも讀了する能はずと云々

是れ專ら私立女學校に關して、言を立つるもの、女子教育に從事するものは宜しく中庸に從ふを要す。今や師範學校女子部生には、頻りに養蠶を見習はせ、其影響小學校の女生徒に及び、實業教育の必要、益唱道せらる、政府は此程「實業教育國庫補助法案」を、衆議院に提出し、井上文相、殊に獎勵熱心なるは、近來の一慶事と云ふべし。

○批評專門雜誌の必要

紛々たる小册子の續々として、出版せらるゝに從ひ、新聞雜誌の批評、漸く粗雜に流れ、今日出版の書籍の評は、明日の新聞紙上に出づる如きを敢て珍しからず。一讀の價あるべしとか、有益の書籍ならんと思はるとか、或は斬新妙案の異常なりとか、大凡新聞雜誌に揭載さるゝ、所謂批評は眞の批評にあらで、一の紹介に止まる。紹介尙ほ可なり、只卷末卷首若しくは目錄をのみ一見して、妄言を吐くものあるに至ては、恕すべからず。

されど國家多事の際、社會の耳目たらんことを期する新聞雜誌記者に對つて、一々ツマラナキ小册子を熟讀して其是非を批評せんとは、到底望むべからず。さりとて又五六年の星霜を費して、辛苦を積みたる著書も、所謂批評記者の學力以上のもの、若しくは評者の主義に反對するものなれば、一夜作りの小說よりも更らに短簡の語を以て、冷遇せらるゝ如きことありては、著者の遺憾少なからざるを察す。先きに「出版月評」と題する批評專門の雜誌出でたりしが暫らくにして消えぬ。今や著者の爲めのみならず、小册子の價値なきものゝ跡を絕ち、好著を獎勵するの方法として、殊に批評專門の雜誌の現はれんことを極めて必要なるを感ずるに至れり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎皇室

●皇后陛下の御誕辰　來廿八日は　皇后陛下の御誕辰なるを以て當日は　皇太子殿下には御參内あらせらるゝ由又各大臣も奉祝の爲め參内し宮内省高等官へ酒饌を賜はるべしと又右に就き華族女學校女子職業學校東京府高等女學校等は臨時休業し一同參校して祝意を表するよし

●皇后陛下の御膳部　申すも畏きとなるが　皇后陛下日々の御膳は左の如しとぞ承はる

一御朝　　御煮物　　御汁　　御香の物
一御晝　　一汁　　三菜
一御夕　　御向付　　御汁　　御膾　　御香の物
　　三日御燒物尾頭附

◎學校、教育

●山梨英和女學校　にては去る五日發起人會を開き同校役員の改撰を行ひたる由其當撰者は理事、根津嘉一郎。會計、堤江助氏。校主、新海榮太郎代なりと云ふ

●裁縫科教授法取調　香川縣山田香川郡甲種研究會にては其取調方案を決議し吉原山田鶴川池田長島大谷の諸氏に取調委員を委囑し猶ほ他に專門家を顧問とし場合に依りては委員を他府縣に派して取調ぶる筈なりと

●裁縫科設置の計畫　岐阜市の各尋常小學校にては未だ裁縫科の設置なき爲め稍々年長けし女生徒は裁縫稽古を名として往々退校する者あるに依り教員中頗る遺憾に思ひて同科設置の計畫を爲し居る向もあるよし

●學齡未滿の幼兒教育　に關して東京府知事は去る十四日、府下各郡市町村に向て左の訓令を達したり

學齡未滿の幼兒を學校に入れ學齡兒童と同一の教育を受けしむるは其害不尠候條右幼兒は幼稚園の方法に因り保育候樣去る明治十七年(二月)當廳丙第三十四號を以て相達候次第も有之候處近來往々小學校に於て普通の方法に因り教授候ものも有之哉に相聞え不都合の儀に付右樣の儀無之樣篤く注意し各小學校へも相達すべし

●師範學校女子部假入學　島根縣尋常師範學校女子部生徒補欠五名の入學試驗に應じ合格して假入學を許可せられし人名は左の如し

鹿足郡　松井ハル　　水澤サダ　　神門郡　森カ子
松江市　薦田チトセ　　島根郡　熱田マサ

●婦德養成と機織業　千葉縣埒陀郡中鄉村の高橋磯五郎氏といへるは太たく女子教道の不振を慨きつゝありしが從來の習ひとて中產以上の女子は結婚の期迫るまで父母の膝下を離れず何一つとして學び得るとなく他家に嫁して始めて大ひに悔ゆるとを見聞しそれ等の矯正には先づ一着として機織業を授くるこそ適當ならむとて同地巡回教師菱沼某女史を雇ひ入れ自宅を工場となし授業しつゝあり教師菱沼氏は夙に教育道化會なるものを設立し女子修身の教育を專らとし傍ら機織業を傳習するの方法なる故に自然と生徒が品格を高め婦德を備ふるにぞ其の父母は悅んで修業さするもの多きを加ふるよし

●小學女生徒の養蠶　小學校生徒の養蠶見習ひは實に奬勵すべきものなるが三重縣四日市の高等小學校にても四年生三十五名をして養蠶せしめつゝありと

●女教員　に就て「大日本教育新聞」論して曰く　女子の性質は幼稚なる兒童の教師として最も適任なる所あれども其人物の撰擇上に就きて兎角の非議を生し教師其物の本質を傷くるに至るこそ是非なけれ、先づ第一には体格即ち容姿上の撰擇なり往年高等女子師範學校にて入學試驗のとき生徒採擇の標準を定めて惡面武骨動作粗撲なるを上とし花顏柳姿、擧止欧優婉なるを下とし兩者の間を百等に分ち醜美に隨ひて配點せしに從て憂慮せし或る一種の弊害は之を以て防ぐを得たれども其卒業期に至り實習の爲め附屬幼稚園生の保育を命じたるに園生の頑是なき孰れも優等生即ち醜面武骨の先生を忌みて劣等生即ち美顏柳姿の教師に慣きたれば同校の計劃は茲に至りて一蹉跌をしたりとぞ左れば體格即ち容姿上の撰擇も亦た頗る面倒なる一儀なり第二には學藝に就きての撰擇なり勿論教師としては一般普通の學藝には是非とも通じ居らざる可らざる事なれども之を兒童に教授するには亦た適不適任不任の差なき能はず即ち裁縫教師として音學教師として採用するは適任なれども体操教師として理科教師として聘用するは不適任なり但し適任なる學科の中にても又た不適任なる教授の中にても或る度までは適任にして他は不適任なる事あり体操科の一部即ち遊戯の如きは適任なれども音樂科の一部即ち軍歌の類は不適任なるが如し第三には性行上の撰擇是なり此個の撰擇は最も非議を生し教師たるの本質を存亡する點なれば特に注意すべき所なり少しの學藝を鼻に掛けて面相の醜を蔽はんとし若しくは生白き顏を恃みて腦中の暗を補はんとするの性行ある者は學校風波の原なれば最も之を排けざる可らず他の長短を說き個の是非を評するは女子の特質なれば又た特に戒めざる可らず親睦會の出席を否まざるもの、同僚間の往來を頻にするもの等は孰れも一癖ある者なれば決して近く可らず頃日近縣の某小學校に女教員の云々より端なく教員の間紛議を惹起し延きて全學校の風波を翻揚し出るの退くのと騷ぐ者ある由なるが當局者に於て若し此等の撰擇法に注意せば女教員の本質をして或は傷くることを莫からしめん乎

◎美談

●褒章下賜　宮城縣士族朴澤三代治氏は曾て實物に頼らず模型を以て裁縫を教授するの一新法を發明し卒業生一千二百餘名を出すに至り別に裁縫教授書及び掛圖等を著作して公衆を益する尠からずとて其善行を表彰する爲め此程賞勳局より藍綬褒章を下賜せられたり

●貞婦賞を受く　富山縣越中國礪波郡西五位村大字土屋村田中吉次郎妻リテは其行ひ感心すべきものとて本月二日賞勳局より左の如く金圓を賜はりしと云ふ

賦性温順母に事へて孝、夫に事へて貞、夫資性多病にして耒耜を執る能はず躬自ら耕耘に服し殊に母の眼疾に罹るや藥餌療養怠らずと雖も遂に明を失するに至り夫も亦尋て亡す遺孤煢々愈々貧苦を極むるも毫も屈撓せず承歡倍々力め朝は母を負ひて佛寺に參し夜は牀褥に侍して老懷を慰め起居眠食意を盡さゞるなく孀婦の身を以て或は傭作に或は賃業に孜々として生計を營むのみならず又能く子女を撫育し一家を保持すること十有餘年一日の如し郷閭賴て其至行を稱す洵に奇特とす仍て其賞として金十五圓を下賜す

◎片々

●支那皇太后の尊號　現時、支那清朝の皇太后は、本年六十歳の壽辰に相當せらるゝを以て、其定例に遵て、慶賀の大禮を擧行せらるべき筈なることは、既に、昨年來、屢々、清廷の官報に在り。今、其大禮の重要なる點を聞くに、皇帝より尊號を増加進呈せらるゝに在り。即、該皇太后の現在の尊號は、『慈禧、端佑、康頤、昭豫、莊誠、壽恭、欽獻、皇太后』と云へるものなるに、又た其『欽獻』の下に、更に「崇熙」の二字を追封稱徧せらるべき筈に、禮部大臣の議決を經て、之を皇帝に奏上し、皇帝の裁可する所と爲れりと

「國光」による

●オール孃の談話　米國前外務卿フォスター氏と同行して、世界い漫遊を試みつゝある同孃は、米國にて共勵會事業に熱心なる人なるが、去る十六日の夜、向町番町教會共勵會の招きにより同會堂に於て、原田助氏の通譯を假り、共勵會に關する一場の談話ありたり。

孤兒の友

一金三拾錢　王子孤女學院へ寄附　佐渡相川町日曜學校生徒一同

右の金額に左の如き書面を附し送られたり感ずべき話なれば之を掲ぐ

相川町日曜學校の有様を申上ます當事聖日に一の科目と一週間の中に名々の家に有りても又は家外に有りても實行に於て何にか善きことをなして日曜ごとに各々其成したることを噺しすることを教へしに夫より各々力を盡して家内にては父母兄姉老人の言にはよく従ひ何に事にもよくつかへ朝起ると直に掃採りより小使又たは弟妹をよく世話することと又たは家外にては何に人にも心せつにすること殊とに相川町には盲人の深山に有る所にて是れまでは其盲人の杖を取たり其の外諸々への惡戯を成したる也然るに夫れと替り盲人にはなしも心せつをなし又は小學校にても是れまで惡戯をなしたる他の子供にも心せつをなし各々學校より歸りて遊ぶ時にも其中に甲乙の者は若し喧嘩する時などは丙の者は夫れ先生の言葉を忘れたか夫れ(よはれ)か忘れたか「愛する者よ我儕互に相愛すべし愛は神より出ればなりおほよそ愛ある者は神に由りて生れ且た神を識る也」と云ひ又は惡しき歌を謡ふたれば夫れ為淫するなかれと云ひ又は謊を云ふと盜む勿れと云ひ如此相互に各々誡め自から愼しみつゝむつまじく日々遊び暮しおり過日小生は聖日に子孤院の事を噺し致せしに其噺の後より各々父母に貰ふ所の小遣錢を二厘三厘づゝ貯めて夫れは積りて三拾錢となり其金を世にきのごくなるあの子孤院に有る子供に施濟なすることを大に悦び小生も神様の御恩に由りて此日曜學校の生徒は此如き善き事をなしてくれるを涙をこぼして悦びます昔しあの貧者の寡婦は余業を箱に投入れた二つのレプタを我主は大に悦び給ひました其の如く今此子供等は余業を子孤院へ投入ました其余業とは日々父母より貰ふ所の小使錢常日はふくのり及び毛糸買求めて日々樂しみ遊び居る其樂しみを皆捨て最も此の善き事を致しました故に此事を右様に御報せ申します

日曜學校生徒左の如し

吉岡ヤス	松下サノ	相黒スイ	鈴木俊	同シン	山本フジ
松田ヤン	同靖	鈴木チヱ	小野マツ	鈴木ヤス	松下仁作
鈴木讓	蔭澤カ子	安田ナヱ	岡山ミヨ	同益蔵	同ナチ
鈴木トミ	友田ミエ	阿部ナ子	安田老人外二十二人		

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述

第五版 百人一首講義

（附錄小倉てびき）

正價金廿八錢　郵稅四錢

絕高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第四版品切に成りたれば玆に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

鈴木弘恭大人著

（半紙判日本綴）

再版增補

文法口授 一名利文獨案内

正價金拾二錢　郵便稅金二錢

目錄

（一）文と云もの丶譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯幷に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

發行所　女學雜誌社書店

農學士米國理學士內村鑑三著

地理學考

正價三十五錢　郵稅六錢

地圖數葉入

目次

第一章　地理學研究の目的
第二章　地理學と歷史　總論、山國論
第三章　地理學と歷史　平原論、海國論
第四章　地理學と攝理
第五章　亞細亞總論並に西方亞細亞
第六章　歐羅巴論
第七章　亞米利加論
第八章　東洋論、支那、印度
第九章　日本の地理と其天職
第十章　南三大陸

此書は十數年間に涉る著者の思考より成り地理學上の事實に下すに歷史的、哲理的、宗敎的の觀察を以てせしものにして常に乾燥無味を以て稱せらるゝ斯學を優麗味ふべきものとして世に紹介せしものなり

發兌　東京新橋出雲町一番地　警醒社書店

賣捌所　神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

○婦女要誌といふ婦女子たるもの一人に一枚（代金八厘郵稅十五枚迄二錢）は欠べからざる衞生に大注意をなしたる發明書今回關口昭知先生の出版にて醫書專賣店東京馬喰町島村利助一手販賣を引受賣出しました………

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

從七位城井悔庵君講述
● 史記列傳講義　全三册　一册廿五錢　郵稅各八錢

小宮山綏介君講述
● 詩經講義　全一册　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
● 墨子文中子講義　合一册　正價廿五錢　郵稅八錢

從七位城井壽章君講述
● 荀子講義　全二册　一册廿五錢　郵稅一册八錢

太田淳軒君講述
● 莊子講義　全二册　一册廿五錢　郵稅一册八錢

慶應義塾大學部講師小宮山綏介君講述
● 韓非子講義　全二册　一册廿五錢　郵稅一册八錢

慶應義塾大學部講師小宮山綏介君講述
● 老子列子孫子吳子講義　全一册　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
● 近思錄講義 附近思別錄　合一册　正價廿五錢　郵稅八錢

平井晉堂君講述
● 戰國策講義　全二册　一册廿五錢　郵稅一册八錢

正七位內藤耻叟君講述
● 靖獻遺言講義　全一册　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
● 大學中庸論語講義　合一册　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
● 孟子講義　全一册　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
● 小學孝經忠經講義　合一册　正價廿五錢　郵稅八錢

石川鴻齋君講述
● 十八史略講義　全二册　一册廿五錢　郵稅一册八錢

石川鴻齋君講述
● 正文章軌範講義　全一册　正價廿五錢　郵稅八錢

石川鴻齋君講述
● 續文章軌範講義　全一册　正價廿五錢　郵稅八錢

太田淳軒君講述
● 唐詩撰三體詩講義　合一册　正價廿五錢　郵稅八錢

賴山陽先生肖像
河村北溟先生講述
論文
● 日本政記講義　全二册　正價六十錢　郵稅八錢

西村豊先生編纂
● 文章詩歌作法良材　全一册　正價四十錢　郵稅八錢

● 正文章軌範白文　全一册　正價十五錢　郵稅四錢

博文館編輯局校訂
● 種彦傑作集　全一册　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
● 京傳傑作集　全一册　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
柳澤、越後、黑田、加賀、伊達
● 騷動實記　全一册　正價五十錢　郵稅六錢

博文館編輯局校訂
● 三馬傑作集　全一册　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
● 眞書太閤記　全四册　一册五十錢　郵稅各十六錢

博文館編輯局校訂
● 源平盛衰記　全一册　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
● 南總里見八犬傳　全三册　一册五十錢　郵稅各十六錢

博文館編輯局校訂
● 通俗三國志　全二册　一册五十錢　郵稅各十六錢

賣捌所　女學雜誌社書店

小此木信一郎
布川靜淵　同著

俳諧史傳　全

和裝美本
紙數三百二頁
定價三十錢
郵税四錢
（五月一日發賣）

『俳諧史傳』出でたり、それ俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七有言、尺幅の裡無限の烟波渺々として際なし、俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す、數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を瀁蕩せしめ幽妙なる詩天地に逍遙す、其源流に遡り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、繙讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしめむとを期したるは我『俳諧史傳』なりこれを分てば、俳人個々の傳記となり、これを聯れは、整々一巻の史篇をなす、逸事あり、名句あり、一誦の下、恍々乎として、月明かに、花香しき境に遊ぶが如けむ、若しそれ、一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確凱切なるや否やは世自ら公論あらむ、世の文士、一本を座右に備へざるべからず、今や印刷成る、我『俳諧史傳』は好知己を待つ者也、

前號に掲載せし後、今日まで得たる批評左の如し、

◉日本の評　著者の意は我國に於て二百餘年の間庶民の詩想を圭りたる俳諧の秘奥を發揮するに在りと云へり、俳諧の淵源種類人物等を詳叙したれば此道を學ぶものゝ爲めには最便宜の材料ならん

◉改進新聞の評　小此木布川兩氏の著にして俳諧の淵源を繹れて其の沿革變遷を順序に叙述し宗祇守武一派の俳諧連歌を説き貞德及び其の流派を叙して談林より正風に及び作者の傳記を列擧し其人を代表するに足るべき名什秀吟を掲出して之が評論を試み簡なるも亦た其大躰に通じて要を摘み史傳として稍や其躰を得たる好著なり

◉上毛新聞の評　本書は俳諧の淵源より俳諧連歌、松永貞德の史傳、檀林派、伊丹、正風、蕉門の十哲等の傳を叙したるものにして遣道に遊ぶの人は一見するの價あらん

◉教育時論の評　字義を説き、起源を陳べ、繼ぎて俳諧諸流派の沿革を叙す。古人の幽韻を温れ、歩武を一段超越の域に印せんと欲するもの、いかでか一讀せざるを得んや

◉扶桑新聞の評　俳諧の淵源、字義、連歌等の根元より説き初め各派の區分、古今諸大家が平生の素行より斯道に於ける經歷に至るまでを詳細に記載したる一大冊子なれば俳諧に志ある人々に在りては最も重寶を感ずるならんと思はる

◉大坂朝日新聞の評　貞德、宗因、芭蕉を俳諧史中の三大關鍵としその淵源、推移の由る所を叙論し名家の紀傳佳什を集蒐す其引用せる所數百部に上り斷輪を探り零墨に求むる其幾許なるを知らずといふ然もあらんかし蓋し近來刊出せられたる俳諧史の最詳備せるもの著者は小此木秀野布川靜淵の兩氏

發行所　女學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

毎月一回發兌
五月五日發兌

第二十四號目錄

●征韓論
●半島に於ける日清露
●立正安國論を讀む
　宗教上の東方問題（二）
●懷往事談、新聞紙實歷
●馬鹿趙高
●法令全書索引目錄
●現住安心論
●基督教界の革新
●お家騷動
●薩長政府豈急かに倒れんや
●蓮門教
●錦織剛淸
●本所の大火（江東居士）
●社會學教授法（布川靜淵）
●二百年后の吾人を評し併せて元良中島二博士か强者の權利の批評を讀む（靜淵）
●涙（韻文）雲峯子

自今毎月五日發行と確定せり

發賣所　女學雜誌社書店

●明治女學校生徒募集廣告

本校四月學年終結に付各級へ新入を許す規則所望の人は郵劵二錢封入御申越あれ

明治廿七年四月

東京市麴町區下六番町六番地　明治女學校

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

發行所　東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY